

## 土佐日記の楫取像

— 漢文訓読語に注目して —

安 田 麻 里 子

## 序

貫之が女性仮託し、かな文字で書かれたと考えられている「土佐日記」において、漢文訓読語が用いられている箇所がある。これは女性仮託が破綻したためであるとか、不可抗力的に混用したためだといふことが多い。しかし萩谷朴氏は遠藤嘉基氏の考えを踏まえながら、訓読語の役割を「貫之は、作品の中でその場の情景と人物とを描写するのにふさわしく、男性的文体と女性的文体とを使い分けている。訓読語彙は、その男性的文体を表明する特色として、意図的に使用されているのである」と指摘する。そして、「これは、訓読語彙の混用が無意識的ではなく、意識的になされたものであるとする点において、正に画期的な意見であった」としながら、「男性的文体を必要とした箇所に限られているか否かということになると、必ずしも、そうだとばかりは言えない」と述べている。(注)

また筑島裕氏は「これは当時の「言文一致運動」の先駆であったのではなからうか」述べる。(注)一方遠藤嘉基氏は楫取や人々の会話部分などを例にあげ、それを「意識的な表現効果」と考えている。そしてこういった訓読語のもたらす効果を、「一種のおかしさ」とであるとす。

考察に入る前にまず、以下のことを付け加えておく。筑島氏の指摘されている十二月二七日の「あるときには」の「或」

は、訓読語の対象からはずしている。これは「あるときには」以外にも、ある人、ある童、などの用法で多く用いられているためでもある。また、『日本国語大辞典』においても、「ある人」や「ある童」と同様のものとして「あるときは」を例に挙げている。<sup>(注)</sup>

「あるときには」を訓読とみなすことはできるが、筑島氏の指摘されたこの十二月二七日のみを訓読語とみなすことはしない。よって、ここでは訓読語の対象外としている。

第一に、訓読語が用いられている効果としては、普段用いられている和語ではなく、わざわざ訓読語にすることによって、その箇所が強調されることになるということ。また漢文訓読語は、和文に比べて畏まった印象を与える。

第二に、漢文訓読語の使用されている対象の人物として、最も多いのは楯取であるということ。これは、それだけでなく漢文訓読語と同所に用いられているということになる。

計四十例の訓読語のうち、十五例が「楯取」や「船子」を対象として用いられている。その他、対象のないものが五例。「人々」、「船君なる人(船君の病者)」、「童」が三例ずつみられる。「ある人」としかない人物に二例。以下、「八木のやすのり」、「淡路の島の大御」、「女」、「亡児」、「一行および見送り人」、「心知れる人」、「海賊」、「薬師」、「物持て来る人」、「歌主」といった人物に一例ずつとなっている。

このことから、「楯取」を対象として用いられている訓読語が圧倒的に多いということが分る。そこで訓読語の効果をあらわす対象を、「楯取」と「楯取以外」という、大きく二つに分類し、それぞれについての考察を行う。

次に作中にみられる訓読語を参考資料として、表にして別表にまとめたが、次の頁に挿入した。以降はこの表を元に考察を進めることとする。

そこで、楯取以外を対象として用いられている訓読語は、その効果ごとに四つに分けて考察する。また、楯取に対

資料 漢文訓読一覧表

月 日	漢文訓読	箇所	対 象	効 果	結 果	和 文 語
12月21日	1 それのとし	地	ナシ	強調・堅い	荘重味・女性仮託	そのとし・さいつとし
	2 いささかに	地	ナシ	強調・堅い	荘重味・女性仮託	いささか
	3 かれこれ	地	ナシ	強調・堅い	荘重味・女性仮託	これかれ・ひとみな
	4 くらべつる	地	ナシ	強調・堅い	荘重味・女性仮託	ならば・たくふ
12月22日						
12月23日	5 ~によりて	地	八木のやすのり	強調	喜び・賞賛	
12月24日						
12月25日						
12月26日						
12月27日	6 くらひつれば	地	楳取	卑俗性	皮肉	くふ
12月28日						
12月29日	7 ~に似たり・ ~に似たる	地	楽師	強調・堅い	厭味・皮肉	やうなり・やうなる
1月 1日						
1月 2日						
1月 3日						
1月 4日						
1月 5日						
1月 6日	8 ~のごとし	地	物持て来る人	強調	厭味	~のやうなり
1月 7日	9 ひそかに	地	歌主	遠慮・堅い	皮肉・厭味	みそかに・しのびて
	10 そもそも	大人	(童・歌主)	強調・驚き	皮肉・厭味	そも
1月 8日						
1月 9日	11 互ひに	地	一行・見送り人	強調	喜び・賞賛	かたみに
	12 見えずして	地	楳取	虚構・強調	皮肉	みえずなりて・みえで
	13 思へらず	地	船子・楳取	強調	皮肉	おもひたらず・おもはず
	14 悪しみて	地	船子・楳取	強調・堅い	皮肉	悪し
1月10日						
1月11日	15 今し	地	童	強調	帰京の願望・望京	いまぞ・いましも
1月12日						
1月13日						
1月14日						
1月15日						
1月16日	16 なくして	地	ある人	強調	出港の願望・望京	なくなりて・なくて
1月17日	17 やうやく	地	楳取	強調	厭味	やうやう
1月18日						
1月19日						
1月20日						
1月21日	18 いふやうといふ	地	楳取	強調	皮肉	いふやうといふ

	月 日	漢文訓詁	箇所	対 象	効 果	結 果	和 文 語
阿 波	1月22日						
	1月23日	19 恐り	地	海賊	強調・堅い	緊張感	恐れ
	1月24日						
	1月25日						
	1月26日	20 申して等る言は一と申して等る。	地	楨取	強調・堅い	滑稽	いふやう—といふ
		21 すみやかに	楨取	楨取	真面目・尊大な態度	滑稽	とく・はやう
	1月27日						
	1月28日						
	1月29日	22 いどこ	書き手	ナシ	強調・堅い	荘重味	いづこ
		23 いひけらく—といひて	地	女	強調・堅い	荘重味	いふやう—といふ
1月30日	24 ~に似たり・~に似たる	地	楨取	強調・堅い	厭味・皮肉	やうなり・やうなる	
和 泉	2月 1日	25 いはく	地	船着なる人	簡潔性・堅い	望京	いふやう—といふ
		26 ひそかに	地	舟に乗る人→船着なる人	簡潔性・堅い	遠慮	みそかに・しのびて
	2月 2日						
	2月 3日						
	2月 4日	27 はなはだ	楨取	楨取	真面目・尊大な態度	滑稽	いと・いたく・いみじ
		28 しかれども	地	楨取	簡潔性・堅い	厭味・皮肉	されど・さはいど・ざりとも
	2月 5日	29 いはく—といふ	地	楨取	真面目・尊大な態度	滑稽	いふやう—といふ
		30 今し	地	ある童	強調	喜び・感動	いまぞ・いましも
		31 ここに	地	亡児	強調	悲しみ	さて
	2月 6日	32 いはく—といふ	地	楨取	真面目・尊大な態度	滑稽	いふやう—といふ
33 いはく—といふ		地	楨取	真面目・尊大な態度	滑稽	いふやう—といふ	
2月 7日	34 いへむげ	地	淡路の島の大御	強調	驚き・不思議	いへば	
2月 8日	35 ~にたへず	地	船着	強調	喜び・感動	たへで	
津	2月 9日	36 ひそかに	地	男ども—ある人(楨取)	強調	厭味	みそかに・しのびて
	2月 9日	37 ここに	地	人々	強調	喜び・感動	さて
		38 いはく	地	人々	簡潔性・堅い	喜び・感動	いふやう—といふ
	2月10日						
山 城	2月11日						
	2月12日						
	2月13日						
	2月14日						
	2月15日						
京	2月16日	39 いはく—といふ	地	人々	強調	喜び・感動	いふやう—といふ
		40 ひそかに	地	心知れる人	遠慮・強調	悲しみ	みそかに・しのびて

※参考資料：「土佐日記全注釈」 萩谷朴著・「平安時代の漢文訓詁語につきての研究」（第六章仮名文学と漢文訓詁 第一節、第三節）築島裕

して用いられた訓読語がもたらす効果に、似た効果を表しているときみなされる訓読語が用いられている人物についても、楫取とは別に考察を行う。そして最後に楫取に関しては、楫取に対して訓読語がもたらしている効果の違いを、二つに分類して考察を加えた。

### 第一節 楫取以外を対象とする漢文訓読語 一

ここからは表を基にし、訓読語の対象となる人物と、訓読語がもたらしている結果ごとに考察を加えていく。本節においては、楫取以外を対象として用いられている漢文訓読語について考察している。

まず第一に、文章に莊重味を加える効果を持つと考えられる訓読語を挙げる。以下の計六例が該当する。十二月二十一日「それのとし」「いささかに」「かれこれ」「くらべつる」の四例、一月二十九日の「いどこ」、「いひけらく」といひて」の二例だ。この六例を、用いられている日ごとに考察を加えていく。

十二月二十一日にある訓読語はどれも地の文にある。「それのとし」という語は、和文では「そのとし」とあるべき箇所だ。この表現は、貫之が任期を終え帰京する年を暈している。これは臚化表現と取れる。

「いささかに」は、「少しばかり」書き付けてみる、という軽き気持ちを表現しているが、日記の作者は到底そのような軽い気持ちで書いているわけではない。またここは「そのよし、いささかに、ものにかきつく」とあることから、帰京後に書いたことを物語っている。

「かれこれ」は、本来「これかれ」とあるべき語である。一月九日には「これかれたがひに」とあり、和文語になっている。このことから、貫之はわざとここを「かれこれ」としていることが分かる。これは「かれこれ、知る知らぬ」

という箇所と対応する。「知る知らぬ」は「知る人知らぬ人」というように、「人」が省略されている。萩谷朴氏によれば、これは「(彼)遠」—此(近)、「知る(親) — 知らぬ(疎)」という対句表現のためだとい<sup>注4</sup>う。

「くらべつる」については、萩谷朴氏が「比」という語が、和文の「ならば」「たぐふ」と共有され、「つきあふ」という意味が「負荷」されたと考えている。「日本国語大辞典」にも「心を通わせあう」意とある。これは本来使用されにくい「くらべつる」という言い回しを、わざわざ用いたということだ。

これら四例の訓読語はいずれも、作品の導入部分にあたる文章に用いられている。土佐日記の短い冒頭部分だけで、四つもの訓読語が使われていることになる。恐らくこれから書き始める日記の冒頭文ということもあり、改まった様子を与えるために用いていると考えられる。萩谷朴氏は「本来男性の執筆する漢字漢文のものであるという当時の社会的通念を前提として、それを女性が模倣して日記を書いているのだと女性仮託のポーズを完璧なものとするために、「かれこれ」「くらべつる」「日しきりに」というような堅苦しい言葉遣いは、(中略)男性の日記文体、すなはち変体和臭の漢文調を出そうとする、苦肉の表現技法であると考えられる」としている<sup>注5</sup>。

一月二十九日は「いどこ」、「いひけらく」といふ<sup>注6</sup>、二例の訓読語がみえる。この日阿波に入って、初めてはつきりとした地名が明かされる。しかもその地名は「土佐の泊」という。貫之はこの地名を、和文語である「いづこ」を用いず、「いこやいど」と訓読語を用いて尋ねる。訓読語によって、畏まって喋っている印象を受ける。都人である書き手が問う状況であるため、そのような言葉遣いになっているのだろう。

次に悲しみやわびしさの効果を出している訓読語をみる。これは、二月五日「ここに」、二月十六日の「ひそかに」の二例がある。

訓読語「ここに」の言葉のすぐ後に、和歌が詠まれている。その和歌は亡見のことを「<sup>ひとひ</sup>日片時も忘れ」ること

のない、「昔へ人の母」が詠む。したがって「ここに」は「昔へ人の母」が亡児を想う悲しみを強調し、強めている。二月十六日の「ひそかに心知れる人といへりける歌」は、二月五日同様亡児を偲ぶ場面である。せつかく長い旅を終えてようやく都へ帰ってきてても、そこにわが子のいないことを悲しむ。そして気持ちの知れた人と、そつと和歌を詠み交わす。ここには、亡児を思う悲しみが漂う。「ひそかに」はそんな気持ちを強調し、強める効果を持っている。さらに望京の念を加える効果をもつ訓読語がある。これは一月十一日「今し」、一月十六日「なくして」、二月一日「いはく」の三例だ。この三例は特に京の都を想って和歌を詠んだり、船出に関することを述べたりしている場面で用いられている。

一月十一日の「今し」は、強調の副助詞である「し」が付いている。本来の和文「いまぞ」を使わないことで、ただでさえ注目を集めるための語である「いまぞ」が、余計に強調されることになる。

「日本古典文学全集13」の頭注には、先の、「京」と「みやこ」に関するときにも一部を取り上げた、「伊勢物語」九段、以下の箇所の投影があるという。「渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、へ…中略…」船こそりて泣きにけり」というように「伊勢物語」は、都にいる人を恋しく思う気持ちを、「都鳥」によって搔き立てられ和歌を詠み、一同が涙するという場面だ。貫之ら一行にとつても、都への思いは強い。土佐日記のこの場面でも、童が「羽根」という地名を聞いて、「飛ぶがごとくにみやこへもがな」と歌を詠む。この歌を人々も「げにと思」い、忘れず心に留める。このことから、ここでの訓読語はこの和漢を強調し、帰京の念をより印象付ける働きがあると言える。

一月十六日の「波なくして」は、和文語では「なくなりて」となる。「ただ、海に波なくして、いつしか御崎といふところわたらむ、とのみなむ思ふ」。このように、先を急ぐ気持ちを表現する箇所に訓読語が使われている。本来和文語であるはずの言葉を訓読語にすることで、その気持ちを強調している。

そしてこの日も一月十一日の「今し」同様、訓読語の後に「この波立つを見てよめる歌」と、和歌が詠まれる。歌の内容は海の波が荒いことを詠む。「船に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になりにけり」と、細かく日数を記しているところからも、船出できない嘆きや、もどかしさが伺える。

二月一日の「いはく」は、和文語の「いふやう」といふにあたる。萩谷朴氏は、「『いはく……となげきて』と反覆確認除法を用いているのは、やはり、めつたにせぬ人の和歌を紹介するために、いかにも重苦しい感じを出させる文章効果をねらって用いた文体であろう」としている。<sup>(注6)</sup>「重苦しい感じ」を狙っているのははっきりと言えないが、ここは日記中で初めて、「いはく(…いへる)」という形の漢文訓読語が用いられている箇所になる。ここでの「船君」とは、恐らく貫之のことだと考えられる。自身の歌を載せながら、「ただ言ことなる」などの低い評価しか与えていない。その船君がせっかく詠んだ歌を載せる、という設定になっている。そもそも和歌を詠むきっかけとなっているのが、「この月までなりぬこと」と嘆きて、苦しきに堪えなかつたためだという。この一文をはさむ形で用いられた訓読語は、望郷の気持ちを強調し、より印象付けている。

さらに、喜びや感動の効果を出している訓読語を挙げる。これは、十二月二十三日「くによりて」、一月九日「互ひに」、二月五日「今し」、二月七日「堪へずして」、二月九日「ここに」、いはく、二月一六日の「いはく」といふだ。この効果をもたらす訓読語がみられる場面も、第三の「望京の念」を加える効果を持っている訓読語と同様に、「帰京」への強い気持ちと深くか関わる場面で用いられている例が多い。

十二月二十三日の「くによりて」は、八木のやすのりという、土佐で重用したわけでもない人物が、わざわざ饒別をしに来たことを「国人の心の常として、いまはとて見えざるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける」と褒め、「これは、物によりて褒むるにしもあらず」と言い訳のように述べた一文にみえる。重く用いたわけでもない人物からも



饒別を受ける、国司貫之の人柄を表しながら、八木のやすのりという人物を、本心から「心ある者」として褒め称える気持ちを強調しているのだろう。

一月九日は、「互ひに」が訓読語になる。ここでは「これかれ互ひに」とあり、「かれこれ」として訓読語を重ねないようにしている。和文語では「かたみに」となる。この人もあの人もかわるがわる見送りに来てくれているのである。前述したように見送りに来た人々のことを、貫之は「志ある人なりける」と褒め、とても好意的に受け止めている。「この人々の深き志はこの海にも劣らざるべし」とまでいっている。よほど見送りに来たことを喜んでいるのだろう。

二月五日に見られる訓読語、「今し」という訓読語は、一月十一日にも用いられていた。しかしその訓読語がもたらす効果は異なっている。この「今し」は当然童の和歌に関わってくることになる。この和歌は「京の近づく喜びのあまりに」詠まれている。和歌が詠まれた動機から分かるように、「今し」は京が近づいた喜びや感動を引き出す効果があるとと言える。

二月七日の「堪へずして」という訓読語は、本来「堪へで」とあるべき箇所だろう。それを、貫之は訓読語の用法で書いている。「みやこ近くなりぬる喜びに堪へずして」ということから、「ちやこが近づいた喜び」が、堪えることができないう。つまり、念願の「みやこ」へ近づけたことが嬉しく、その喜びをこらえることが出来ないということだ。その喜びの気持ちを、わざわざ訓読語を用いて強調しているのである。その喜びの大きさが知れるだろう。

二月九日の日は「ここに、人々のいはく」と、訓読語が続けて二例用いられている。ここは情景と合致させながら、業平のことを引き合いに和歌を詠み合い、都が近づいたことを喜び合っている場面だ。「土佐日記全注釈」では、「ここに」が、「紀氏の歴史に重要な意味を持つ惟喬親王の故事をこれから紹介しようというので大いに改まった厳肅な

「気持ち」の表れだとし、「いはく」を「いはく」を受けた会話文が「……ところなりけり」という会話語の詠嘆で終止し、「いはく」に対応する「……といへり」「とぞいへる」といったト書きの説明文が省かれているところに、作者貫之自身の万感胸に迫る感動の強さが看取せられる、と解している。<sup>(注6)</sup>確かにわざわざ「ここに」と場所に注目させ、その場を改めていとも取れる。その後には業平を引き合いに出し、三首もの和歌を詠み合う。そのためか、「いはく」に対応するはずの「いへる」が流れてなくなっている。この狙いとしては、京が近づいた喜びのあまり、立て続けにいくつもの歌が詠まれ、つい「いへる」が流れてしまった、というところだろうか。これらのことから、ここでの訓読語は京の近づいた喜びや感動を表す効果があると分類できる。

二月十六日は、「人々のいはく」「この川、飛鳥川にあらねば、淵瀬さらに変はらざりけり」といひて」とある。「いはく―いひて」が訓読語だ。この箇所は、いよいよ入京する喜びのあまり、和歌を詠みあう。入京できた喜びを強調する効果があるだろう。

以上の例が、喜びや感動の効果を加えている漢文訓読語と分類したものだ。またこれらの感情とは、異なる効果を出していると考えられる、三例の訓読語についてもここで考察を加えておきたい。その三例が、一月二十三日「恐り」、二月一日「ひそかに」、二月六日にみられる「いへれば」だ。

まず一月二十三日の「恐り」がある。ここは、海賊の恐れがある海域でのことである。海賊の脅威が本場にありえたことであるならば、この「恐り」は、堅く畏まった、緊張感を漂わせる効果がある。

二月一日の「ひそかに」は、船君が詠んだ和歌を評する人々の様子を形容する言葉に、訓読語が用いられている。船君は基本的に、歌があまり上手いわけではないという設定になっている。その船君がせつかく詠んだ歌を載せていることになる。さらに、その歌は望京の思いを詠んだものであり、同じく都を恋しく思う船人らにとつて、そのよう

な歌を軽々しく批評できない、という遠慮の気持ちがあつたのかもしれない。

最後に二月六日の「いへれば」についてだ。これは淡路の島の大御おほいごという人物が和歌を詠んだことに対する言葉だ。「いと思ひのほかなる人のいへれば、人々あやしがる」とある。この淡路の島の大御おほいごという人物は一月九日と一月二十六日の「専女」、「淡路の専女」と同一人物であると考えられる。一月二十六日の条では、和歌の詠み手として登場しているが、詠まれた和歌に対する評価は書かれていない。またこの二月六日の文章からいくと、淡路の島の大御おほいごという人物は、普段和歌を詠まないようだ。この「あやしがる」様子から、「いへれば」という訓読語には、淡路の島の大御おほいごがわかを詠んだことに対する驚きや不思議に思う気持ちを強調する働きがあると言える。

これまでの考察では、まず書き手は、冒頭では莊重味を出すために訓読語用いている。そして見送り人や童、船君なる人物には、喜びや悲しみ、望京の念という書き手の気持ちを強めるために訓読語を用いていると分かった。

## 第二節 楫取以外を対象とする漢文訓読語 二

十二月二十九日「ゝに似たり」は薬師、一月六日「ゝのごとし」は物持て来る人、一月七日「ひそかに」、「そもそも」は歌主が対象となつている。ここでは、こういった楫取以外の人物に対して用いられている、「厭味」や「皮肉」の効果をもつ訓読語をみていく。

まず対象が薬師である十二月二十九日「ゝに似たり」だが、この「志あるに似たり」は、和語で「志あるやうなり」となる。加えて翌日の元旦には、薬師の持ってきた屠蘇、白散が海に落ちても「海に入れて、え飲まずなりぬ」とあるのみだ。ここから、いかに薬師が持ってきたものに関心がなかつたかが伺える。薬師は遠藤嘉基氏が指摘している

ように、職員令によつて「凡國博士醫師、國別各一人」と、講師と共に各国に一人ずつ置かれていた。<sup>(註7)</sup>十二月二四日、見送りに来ていた講師に貫之は、「講師むまのはなむけしに、いでませり」と敬語を用いている。これに対し、薬師には「志あるに似たり」と書き、「志ある」と断言もせず、敬語も用いていない。

この人々の深き志はこの海にも劣らざるべし」と褒め称えている。薬師に対する「この人々ぞ、志ある人なりける」という一文は、明らかに「志あるに似たり」の訓読語を用いた書き方とは対照的だ。到底、「志」ある人物であると考へていたように思えない書き方になつてゐる。ここから、この「〜に似たり」という訓読語は、明らかに薬師に対する嫌味、皮肉が込められてゐると考へられる。

一月六日は、物持て来たる人に対して用いられてゐると考へられる、一月六日「〜のごとし」についてみる。本来ならばここは、「昨日のやうなり」とあるところだ。それをわざわざ訓読語を用いて「昨日のごとし」としてゐる。漢文にすれば「如昨日」と、たった三文字になる一文で、この日の記述は終わる。一文のみの日記に、わざわざ訓読語を用いてゐるため、堅い印象を受ける。「昨日のごとし」という内容は、一月五日にある、見送りの「人々、絶えず訪ひに来」ということだ。この「ごとく」という語は、昨日と同様に貫之ら一行から何がしかの返礼を期待し、絶えずやつてくる人々に嫌気がさし、うんざりした気持ち強調するためなのではないだろうか。

それから一月七日の、歌主に対して用いられてゐる「ひそかに」「ひそかに」について考察する。「ひそかに」は、「土佐日記全注釈」に以下のようにある。「成人の世界に口出しする子供の、おずおずとした態度が表現されている」とあるそれだけでも歌主に対しての礼を欠いてゐると取れる。その童の様に「みそかに」と和文を用いず、漢文訓読語を用いることにより、遠まわしに歌主のことを皮肉つてゐるのではないだろうか。<sup>(註8)</sup>

遠藤嘉基氏の指摘では、この場面で童の歌を聞きだそうとする大人の発言である「そもそも」という語は、「源氏

物語」中では「僧侶などの知識階級に属する人のことば」であるという。「日本国語大辞典」には「『そも』を重ねて強き語。もと主として漢文訓読また漢文訓読調の文章に用いられた」とあることから、「そもそも」も、漢文訓読語である。歌主に対する返歌についての文、言葉だけで、二箇所も訓読語を用いている。この「そもそもいかがよんだる」という大人の台詞は、童に対して発させた言葉だが、この問いかけの内容は、歌主に対する返歌を問うものであり、童が和歌を詠んだという驚きだけでなく、暗に「あんな歌に対して、どんな返歌が詠めたのか」という意味も持っている。ここで「みそかに」や「しのびて」ではなく「ひそかに」という訓読語を用いたのは、歌主と対照的に例え童でも、無粋な歌を詠むような歌主とは一線を隔するのだと言いたかつたのではないだろうか。そのことにより、結果的に無粋な歌主のことを皮肉っている。

このように「見送り人」や「心知れる人」好意的な感情を持っていない人物に対しても、訓読語を使用していることが分かる。では、訓読語が最も多く用いられている楫取は、どのような効果を与えるために訓読語と共に書かれているのだろうか。

### 第三節 楫取の滑稽さを加える効果をもつ漢文訓読語

作品中にみられる訓読語計四十例のうち、十五例もの訓読語が船子や楫取、を対象としている。このことから、楫取という特定の人物に対して用いられている訓読語が、他の登場人物に比べて特に多いことがわかる。

そこで本節では、楫取に対して用いられた漢文訓読語の中でも、特に「滑稽さ」を加える効果を持っている訓読語について考察する。これは一月二十六日「申して奉る言は——と申して奉る」、「すみやかに」、二月四日「はなはだ」、

二月五日「いはく—とぞいふ」(三回)となる。まず一月二十六日の「申して奉る言は—と申して奉る」、「すみやかに」の二例の訓読語についてみる。

一月二十六日は、「楯取の申して奉る言は」、「この幣の散る方に、御船すみやかに漕がしめたまへ」と申して奉る」である。まず「奉る言は—申して奉る」については、敬語表現をなくせば「いふやう—といふ」となる。敬語を払う相手はもちろん海の神だ。ここは御幣を海の神に捧げ、海を鎮めようという場面だ。そしてこの言葉に挟まれる形で、楯取の台詞に「すみやかに」という訓読語が使われている。和文では「とく」「はやう」となる。この語は楯取が生みの紙に対して口にした言葉だが、楯取が訓読語を口にしていて、という点が重要なのである。したがって、この訓読語の効果は楯取に向けられたものとなる。

むしろこのように畏まった言い回しや言葉遣いをさせることで、身分の低い楯取が真面目にやればやるほど不釣合いに見え、滑稽に映る。これは、二月四日の「はなはだ」でも言えることだろう。この点については、二月四日の箇所でも考えてみたい。また、御幣を捧げたこの場面は、一月三十日の条にも関わってくる。次に、二月四日の「はなはだ」を考察する。

二月四日の日にみえる訓読語「はなはだ」の和文語は、「いと」「いたく」「いみじ」などになる。この「楯取、「今日、風、雲の気色はなはだ悪し」」について、「源氏物語」に漢文訓読語「甚だ」が使われている場面があった。「少女」の段で、夕霧を大学に通わせるため、字を付ける儀式を行うときのことだ。本来源氏ほどの上層貴族たちは、必要な品や学は自然に身につくものとされ、大学に通わないことのほうが多かった。それが貴族にとつての常識であった。そのため源氏を始めとした貴族にとつて、博士らの行う儀式は普段見慣れていないものであった。その慣れない様子を見咎めた博士らが、「はなはだ」を口にする。

博士「おはし垣かきもと下あるじ、はなはだ非常にはべりたうぶ。かくばかりの著しるしとあるながしを知らずしてや、朝廷には仕うまつりたうぶ。はなはだをこなり」など言ふに、人々みなほころびて笑ひぬれば、また、博士「鳴な高たかし。鳴やまむ。はなはだ非常なり。座を退きて立ちたうびなん」など、おどし言ふもをかし。

引用箇所を参照すれば、本来和歌も解さない無風流な人物である楯取が、不似合いな漢文訓読語を口にする。これは、とても滑稽なことではないだろうか。このように、楯取に訓読語を言わせているのは、不釣合いな言葉を使う楯取が、真面目に言えば言うほどおかしさが先にたち、滑稽である様子を表現するためだと考えられる。

最後に、二月五日の「いはくーといふ」という言い回しだ。この書き方は、この日の楯取の三つの台詞すべてに共通して用いられている。

二月五日の日、「いはくーといふ」の言い回しが三度も用いられている。しかもそのいずれも楯取の台詞の箇所となっている。「土佐日記全注釈」では「楯取の尊大な態度を表現するため」として<sup>(注10)</sup>いる。

「楯取、船子どもにいはく、「御船より、仰せ給たぶなり。朝北あきたの、出で来ぬ先に、綱手はや引け」といふ」という本文箇所だ。ここでは、楯取が船子に支持を出している。たしかに尊大な態度と受け取れる。そして、このときの楯取の言い方が、一月二十一日と同様に和歌めいているという。この日は一月二十一日よりさらに進化し、「歌のやうなる言こと」を「おのづから」口にしていて、書き出してみると三十字あまりであつたらしく、「げに、三十文字みそもじあまりなりけり」と、感嘆している。しかしいくら感嘆しているといつても、やはり本無風流な人間である、所詮は楯取が、和歌めいた言葉を口にしてるのが滑稽だという意識がある。それが訓読語に表れているのではないだろうか。

その他の「いはくーといふ」は、一月二十六日、一月三十日と同様に、神仏に御幣を奉る楯取を描く場面での、楯

取の台詞に使われている。楯取が大真面目に神仏に御幣を捧げているのに対し、貫之は「口惜し」などと書いており、大真面目な楯取を冷やかな目で見る。御幣をささげた後、海が鎮まる。これについても、「楯取の心は、神の御心なり」という言葉で締めくくり、これ以降、二度と楯取の名を出さなくなる。これは相手を褒めているようで、実は相手を思い切り皮肉って言っている言葉だ。そのような言葉を最後に、貫之は楯取の名を伏せ、口を噤むことになる。これらことから、この二つの訓読語は真面目な楯取の滑稽な様を笑う気持ちから、また痛烈な厭味、皮肉が表現されていると考えることができる。

#### 第四節 楯取への皮肉や厭味を加える効果をもつ漢文訓読語

最後に、皮肉や厭味を加える効果をもつ訓読語について考察する。これは十二月二十七日「くらひつれば」、一月九日「見えずして」、「思へらず」、「悪しみして」、一月十七日「やうやく」、一月二十一日「いふやう」とぞいふ、一月三十日「く似たり」、二月四日「しかれども」、二月八日「ひそかに」の計九例である。

十二月二十七日の「くらふ」については、「日本国語大辞典 第四卷」の「語誌」に「中古仮名文学作品には『くらふ』はほとんどみられず、一方漢文訓読の方では『くふ』も用いられるが『くらふ』の方が多い。『くらふ』は俗語的位相と漢文訓読語系文語という両極端で使われたことになるが、漢文訓読の『くらふ』は当時の卑俗語としての用例が影響したものと解釈されている」とある。

また、「日本古典文学全集13」の頭注には「『くらふ』は『食ふ』より卑しい語。船頭批判の気持ち」とある。<sup>(注1)</sup> ことでの「くらふ」は漢文訓読においてよく用いられる、俗語的な言葉であるといえる。つまり楯取の卑俗性を表現して



いることになる。これは書き手が、楫取のことを丁寧な言葉遣いより俗語が似合うような、雅な人物ではないと考えているためだ。ここから、楫取を俗な人物として快く思っていないことが分かる。

一月九日の日にある訓読語、「見えすして」は、「にひらびかし西東も見えずして」とある。「土佐日記全注釈」には、「上弦ごろの半月が、そんなに暗いはずがない」という理由から、「乗客の心細さと船員の気随さとを効果的にコントラストするためのフイクション」、「誇張」であり、「戯曲構成・脚色虚構」と判断している。(注12)また、この日は船が岸から離れるにつれて、船の人も見えなくなるといふ一文もある。ここは、対句的に文章が並べられており、まるで漢詩の書き下しのようでもある。対して、「見えすして」は対句表現ではなく、まさに漢文訓読語そのものを用いている。次にその九日の該当箇所を並べて記している。

かくあるを見つつ漕ぎ行くまにまに、山も海もみな暮れ、夜更けて、西東も見えずして、天氣のこと、楫取の心にまかせつ。

「志ある人」である見送りに来た人々には、対句表現を用いている。対して、天候を読んで船を出すのが仕事である楫取に関する記述では、漢文訓読語を用いている。「西東も見えずして」という文章は、そのすぐ後の「てんけい天氣のこと、楫取の心にまかせつ」にかかっている。そうすると、確かに「見えす」というのは虚構だけではなく、この訓読語が楫取に対して用いられていると考えられる。

「思へらず」もまた、船子と楫取にかかっている。彼等の口にした船歌により、先ほどまで「いと心細く」、「船底に頭をつきあてて、音ねのみぞ泣」(注13)いていた国司一行は、その歌によって人が笑うのを聞き、「海は荒るれども、

心はすこし風」ぐ。歌をきいてすぐに心が風いだのではなく、歌で人が笑うのを聞いて心が風いでいる。船子や楫取の歌が、直接そうさせたわけではない。これによつて、天気、天候に關しては一任している楫取が、こんな荒れた海であるにも關わらず船出をしたこと、一行が怯えているのに船歌を歌う様子を、皮肉を込めて描いると考えた。

「悪しみして」は、「翁人一人、専女一人」に對して使われている。彼らは氣分を悪くして、食事もせず早々に寝てしまった。これは、荒れた海を渡ってきたせいで氣分を悪くしたのだろう。氣分を害したことを強調し、堅い雰圍氣を出そうとした。そうすると海が荒れているにも關わらず船出した楫取に對する遠まわしな厭味と取れる。

一月十七日の「やうやく」は、和文では「やうやう」にあたる。この「やうやく」は、雲が晴れてきていた明け方に船を進めたが、だんだんと雲行きが怪しくなつてきてしまった状況で使われている。せつかく前日から空を覆つていた雲もなくなり、船出できた喜びを和歌に詠みながら進んでいたところだった。それを「夜やうやく明けゆく」につれて、雲行きが怪しくなつてきたと、楫取が船を返してしまつたのである。つまりようやく船出が叶い、皆で暁月夜の興を催していたものを、天候が悪くなつてきたという不粹な楫取が台無しにしてしまつたのである。ただこのあと本当に天氣がくずれたようで、「雨降りぬ。いとわびし」とある。このような天候の悪化は楫取のせいではないにしろ、船出を喜んでいた一行に水を差したのは楫取であることにかわりはない。そのため、「夜やうやく明けゆくに、楫取ら、」と訓読語と「楫取」という語を続けて書き、やり場のないわびしさを楫取へと向けていると考えられる。

一月二十一日の訓読語は「いふやう」とぞいふだ。本文、「楫取のいふやう」「黒鳥のもとに、白き波を寄す」とぞいふ」の箇所は、本来訓読語を用いなければ「いふやう」といふとなる。それを、「とぞいふ」と訓読語を用いて強調している。そしてここは、楫取が「黒鳥のもとに、白き波を寄す」という、「ものいふやうにぞ聞こえたる」言葉を口にする場面だ。「人の程」にあわないただの楫取などが、「ものいふ」ように聞こえる言葉を口にした。これは、本来そんなことは到

底言いそうにない楯取が訓読語を用いることによって、彼の言葉を強調し、それによって楯取を皮肉っている。

一月三十日は訓読語を用い、「神仏の恵みかうぶれるに似たり」とある。和文語では「〜に似たり」が、「やうなり」「やうなる」となる。この「〜に似たり」という訓読語は、十二月二十九日にも薬師に対して用いられていた。素直に神仏の恵みのおかげだと言いつらさず、わざわざ「〜に似たり」と遠まわしにいい、含みを持たせる。これは、この日の日記、「海賊は、夜歩きせざなりと聞きてへ…中略…」からく神仏を祈りてこの水門をわたりぬ」の箇所と呼応しているとも考えられるが、「今日、海に波に似たるものなし」という一文から、海賊の脅威についての神仏の恵みではなく、海荒れに関する神仏の恵みであることが分かる。ここは、一月二十六日の楯取が御幣を捧げた場面のことを指していると考えられる。そうすると、その二十六日に楯取が御幣を捧げたことを、内心では快く思っていないかったということになる。一月二十六日の「奉る言は―申して奉る」「すみやかに」、一月三十日の「〜に似たり」、この三つの訓読語は、全て楯取への厭味、皮肉、冷やかな気持ちの表れであると取れる。

二月四日では、「はなはだ」の対象が楯取のため、「しかれども」について考察する。楯取の台詞である、「今日、風、雲の気色はなはだ悪し」に対し、書き手は「しかれども、ひねもすに風波立たず」と訓読語で否定する。訓読語という畏まった言葉遣いは不釣り合いな楯取の台詞に対し、同じく訓読語を用いて皮肉っぽく言葉を否定している。

二月八日の日は本来和文語で、「みそかに」や「しのびて」とあるところだ。そこに訓読語である、「ひそかに」が使われている。ここは「ある人」が持つてきた、「あざらかなる物」について、一行の男たちがこそこそ悪口を言う場面だ。これは「男ども」から、「ある人」に対する厭味な気持ちが表れている。では「ある人」とは誰だろう。これには一月十四日が関係してくるだろう。この日の、「楯取りの昨日釣りたりし鯛に、銭なければ、米を取り掛けて、落ちられぬ。かかること、なほありぬ」という箇所には、楯取が魚を持つてきたので米と交換してやった。このよう

なことはまだあった、と記してある。一月十四日にある「かかることなほありぬ」が、この箇所だと考えると、この日の「ある人」は楳取であると考えられる。このように貫之は、二月五日を境に楳取の名をはっきりと記さなくなる。直前の二月五日には畏まった訓読語を多用しながら、「楳取の心は、神の御心なり」とまで言い、相手を皮肉っていた。それが、この二月八日になると、厭味こそ変わらないものの、楳取という名を出さなくなっていることが分かる。

## 結

以上のような考察により、楳取に関する記述の箇所には、漢文訓読語が多用されており、その多くは楳取への厭味や皮肉といった効果をもたらしていることが分かった。また、厭味や皮肉の効果を表すための訓読語は楳取だけでなく、薬師や歌主に対しても用いている。このことから彼等もまた、貫之にとつて気に入らない人物であったと言える。

これらの訓読語はすべて貫之の、彼らに対する嫌悪感から来ているものだと考えられる。貫之が楳取を嫌悪した理由としては、次のようなことが理由に挙げられる。

まず、一刻も早い帰京を望む一行にとつて、何日も港に足止めされたことが大きな理由のひとつとなるだろう。出航を決定していたのは楳取だ。「天氣のこと、楳取の心にまかせつ（一月九日）」と、天候のことは楳取に任せているとある。その舵取りが天候の判断を誤り、港に足止めされることがある。二月四日には、ろくに空模様も予測できないと文句を言っている。

その他の理由として、和歌もろくに理解できず、詠むことも出来ない無風流で無教養であることが挙げられる。十二月二十七日に、別れを惜しむ人々へ、風流を解さない無粋な楳取が水をさしている場面がある。ここだけではな

く、一月十八日にも「この歌どもを、人の何かといふを、ある人聞きふけりてよめり。その歌、よめる文字もじ、三十文みそ字余り七文字。人みな、えあらで、笑ふやうなり」とあり、とてもまともな和歌が詠めない様を人々が笑っている。そして最後に、これが最も大きな要因と思われる、楫取との不平等な食料品の物々交換だ。これによって利益を求める楫取の強欲さが、楫取を嫌悪する理由の一つとなっているのだろう。

「鯛持て来たり。米よ・酒、しばしばくる。楫取、気色悪しからず（一月十四日）」や、「今日、節忌すれば、魚不用（二月八日）」とある。釣り合わない物々交換が度々行われたようだ。

海の神に幣を奉るよう促す楫取に、貫之は二月五日に以下のようにも言っている。

鏡に神の心をこそは見つれ。舵取の心は、神の御心なりけり

幣を多めに奉ると、海が静まり波風がなくなったという。そこで幣を奉るよう進めた楫取のことを「舵取の心は、神の御心なりけり」とまで言う。一見褒めているこの言葉は、実は不平等な物々交換をしてくる楫取の強欲さを引っ掛け、皮肉を述べているに過ぎない。「神の御心」とまで言い、よほど楫取の強欲さに嫌気が差していたことが窺える。

注

注1 萩谷朴「土佐日記全注釈」（六十頁～六十一頁）

遠藤嘉基「文体と表現意識——土佐日記の文章を通して——」

（京都大学文学部研究紀要）巻号4 京都大学 一九五六年二月二十日

注2 筑島裕「第六章仮名文学と漢文訓讀 第三節」（八二六頁）

『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』 筑島裕著 東京大学出版 一九六三年三月十日

注3 「日本国語大辞典 第二版 第一卷」(六六一頁)

注4 注1萩谷朴に同じ(六一頁)

注5 「日本国語大辞典 第二版 第四卷」(一〇五二頁)

また、「角川古語大辞典第二卷」(角川古語大辞典 第二卷)(八三頁)では、この箇所を例に挙げ、「お互いに親しく付き合う」としている。

注7 注2に同じ

また、「国司制度」(吉村茂樹著 塙書房 一九六二年九月二〇日)にも、「雑任国司」に「国博士・国医師・陰陽師及び弩師もこれを総称した場合もあった」とある。

注8 注1萩谷朴に同じ(一四二頁)

注9 注2に同じ

注10 注1萩谷朴に同じ(三三二頁)

注11 注15に同じ(一〇三九頁)

注12 注1萩谷朴に同じ(一六九頁)

注13 注1萩谷朴に同じ(五七、五八頁)

注22 注1萩谷朴に同じ(三六七頁)